鈴木サナエ（すずき さなえ）

# 山登り、時々山菜遊び

日が伸び、ポカポカと暖かくなって、いっせいに花が咲き始め、周りの山々が日増しに色づき始める雪国の春は、何かと慌ただしい。雪代でたっぷり水分を含んだ畑が乾燥してくると、畑を耕し、肥料を施し、次々と種まきが始まる。

そんな周りの人たちの日々の営みの中でも、若い頃から山に憧れていた私の眼差しは、自然と山の方に向かう。今でこそ、ある程度自由に、自分の技量にあった登りたい山に登っているが、若い頃は登れるだけの気持ちの余裕も、時間的な余裕もなく過ごしていた。それでも娘が保育所の時は、浅草岳へも連れて行ったし、小学校に上がると、尾瀬や燧ケ岳、田代山へも登った。

そんな時、大人たちに

「山さ行って、何にも採ってこねえで、何がおもっしぇやあ。」

と真面目な顔で言われたが、私は返す言葉を持たなかった。四十年近く前の只見の人々の山は、生活の場だったのだ。事実、只見の良質なゼンマイが市場を動かし、高値で取引され、「ゼンマイ御殿」などと言われて、家が新築されることもあったと聞いている。

子供が大きくなって、ある程度聞き分けができるようになり、私が居なくても朝を過ごせるようになった頃、友達がワラビ折りに誘ってくれた。

友達とは朝の四時に待ち合わせて、前日の夜に用意しておいた、籠や手袋などを抱えて山に急ぎ、七時頃には帰って来て、何食わぬ顔で勤め先に出勤していた。最初は何処にワラビが採れるかもわからず、やみくもに山の中の藪を歩き回ったが、一、二年もすると、太くて柔らかな、良質のワラビが採れる場所に行きついた。今では考えられないけれど、当時はそんなに早く行っても必ず、先に折っている人がいたから、採れる時期が限られる山菜採りは、いきおい、短期決戦となるのだった。単独行の時はトレーニングと称して山裾から歩いたし、あまり採れない日は、山頂まで歩くこともよくあった。キバナノイカリソウやオオバキスミレなど、思い掛けない花が咲いているのを見つけ、春のうつろいを感じることができるのは、何より嬉しかった。そしてまた、今まで、買って過ごしていたワラビを、買う必要もなくなって、姑も喜んで塩漬などの後始末をしていてくれていたのも、嬉しかった。

そんなある日、家の向かいのおばあちゃんが私のとってきたワラビを見て

「にしゃ、稼ぐなあ。」

と、しみじみ、のたまったのには心底びっくりした。私はそれまでだって会社の仕事に励み、朝晩は掃除、洗濯、炊事と充分に働き、忙しかった。それでも、そんなのは当たり前で、稼ぐことには値しないのだ。ひとつ前の世代の人にとって、稼ぐとは、身体をはって、田畑を耕したり、山に行って糧を求めてくることらしい。山菜取りは、あくまで楽しみだった私が、いきなり「稼ぐ女」として認められたのだ。まさに、目からうろこの気づきだった。私を「稼ぐ女」としてただひとり認めてくれたおばあちゃんは、もうこの世にいないけれど、私は今でも「稼ぐ女」として、毎年の春には、ワラビ折りに勤しんでいる。